

琉球大学学術リポジトリ

西表島におけるイノシシ猟の伝統技術と実状

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2007-06-15 キーワード (Ja): イノシシ猟, ワナ, 伝統技術, 西表島 キーワード (En): Wild boar hunting, Trap, Tradisional techniques, Iriomote island 作成者: 石垣, 長健, 新里, 孝和, 新本, 光孝, Ishigaki, Choken, Shinzato, Takakazu, Aramoto, Mitsunori メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/570 |

西表島におけるイノシシ猟の伝統技術と実状

石垣長健,^{1*} 新里孝和,² 新本光孝¹

¹ 琉球大学熱帯生物圏研究センター西表実験所

² 琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター

The traditional techniques and current conditions of wild boar hunting in Iriomote island

Choken ISHIGAKI,^{1*} Takakazu SHINZATO², Mitsunori ARAMOTO¹

¹ *Iriomote Tropical Biosphere Research Center, University of the Ryukyus,*

² *Subtropical Field Science Center, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus,*

Abstract: The wild boars that live in Iriomote Island are Ryukyuan wild boars, which are smaller than Japanese wild boars. The wild boar hunting has been maintained in Iriomote Island by the islanders who coexist with the island's natural resources. This paper traces the transitions of the traditional techniques of the wild boar hunting in Iriomote Island, and clarifies such facts as the number of living wild boars, and the methods of wild boar hunting employed by the islanders. It is hoped that this research will contribute to sustainable and stable wild boar hunting on the island. Our investigation reveals that as the number of wild boar hunters has increased, the number of living wild boars has decreased rapidly. The method of wild boar hunting has changed over the years in the following order: pressure-trap hunting, dog hunting, *hane*-trap hunting, and sporting-gun hunting. Currently, *hane* traps and sporting guns are widely used, but the trap method is most popular in Iriomote. A *hane* trap consists of six parts: *chibo*, bamboo, *ningyoo*, *tsume*, stepped tree, and a wire that is peculiar to Iriomote island. Of these, *chibo* is most important, and 20 kinds of trees are used for it. Among these trees, six kinds, such as *shimamisaonoki* (*Randia canthioides*) are most suitable. As for boar-fences, there are those that are made of stones, those that are made by making a hollow in a slope, those that are made by wood, etc. Sandstone and coral are used for stone fences, and *sagaribana* (*Barringtonia rasemosa*) is used for wood fences. It is necessary to reexamine the traditional way of coexistence between humans and nature in order to maintain wild boar hunting in Iriomote Island.

キーワード： イノシシ猟, ワナ, 伝統技術, 西表島.

Key words: Wild boar hunting, Trap, Traditional techniques, Iriomote island.

はじめに

琉球列島は、生物地理学上古くから興味のあるところとされ、沖縄の自然の国際的価値は広く世界へ知られている。¹⁾ 俗に「東洋のガラパゴス」と呼ばれ、イリオモ

テヤマネコ、ノグチゲラ、セマルハコガメ、ヤンバルクイナ、ヤンバルテナゴコガネ、ヤエヤマヤシなどの沖縄特産固有種が国の天然記念物に指定されている。沖縄の島々は元来、亜熱帯性植物に覆われ、亜熱帯照葉樹林が展開し、その中に野生の特産動物が生息している。この

*Corresponding author (E-mail: iriomote@eve.u-ryukyu.ac.jp)

ような動物地理学上の特性は、主として、琉球列島の地理的位置、島々ができた成因、風土並びに亜熱帯性植物によって育まれ、支えられてきたことに起因すると思われる。特に亜熱帯照葉樹林に負うところが大きく、森林は特産動物のふるさとと考えられる。¹⁾ 西表島においては、森林の特産動物としてイリオモテヤマネコとリュウキュウイノシシがあげられる。

イリオモテヤマネコは国の特別天然記念物に指定され、環境省の野生生物保護センターが、保護、増殖の調査、研究を行い、伊澤^{2,3)}らによって生態学的研究が進められている。一方、リュウキュウイノシシは、地元では古くから動物性蛋白資源として利用されてきたにもかかわらず、その民俗学的、生態学的な研究はほとんど見受けられない。このような生態学的研究は、今後の専門家の研究を待つこととして、ここでは、西表島西部地区（祖納、干立、白浜）における、古くからリュウキュウイノシシにまつわる狩猟について民俗学的視点から調査を行なった。

西表島西部地区の祖納部落は民話にイノシシの話がいくつかあり部落名を俗称で「スネカマイ」（藪やスキ原野などの坂をイノシシのように行ったり来たりしているようす）と西表島の方言で呼ばれている。⁴⁾ イノシシは全国的に一般的な狩猟対象獣となっており、食用としても高い評価がある。西表島のイノシシも住民の間で同様に害獣、狩猟、食用として生活と深い関わりを持っている。近年、全国的にイノシシの生息地域が、増加する地域と減少している地域があるといわれている。西表島では以前は一人一日に15～16頭獲れた期間もあったが、現在では狩猟者が増え、イノシシの生息数が減少しているのではないかと危惧されている。最近、西表島の観光入域者が著しく増大し、島内の人口も徐々に増加しつつあり、それに伴って島内では外食産業等が増加の傾向をみせ、イノシシの食用としての需要が急速に高まってきてい

る。しかし、イノシシ肉は島内での需要が高く伸びているにもかかわらず、年々捕獲される大部分のものが生体のまま島外に搬出されているのが現状である。

本研究は、西表島におけるイノシシ猟の変遷、実態を究明するとともに、イノシシの生息密度と捕獲のバランスを保持し、適切で持続可能な狩猟を構築することを目的とする。今回は、イノシシの地理的分布について既存資料から解説し、西表島西部地区を中心としたイノシシ猟の変遷、猪垣および罾について調査した。

西表島の概況及び調査方法

1. 概況

西表島は古見岳(470m)、デドウ山(441m)、御座岳(420m)の三峰を有し、その溪谷に浦内川、仲間川、仲良川などの河川が流れている。島はほとんどが亜熱帯照葉樹林で覆われ、陸海の自然が豊かなことなどから「日本最後の秘境」といわれている。方言では、「イルンティ」、「イルムティ」と呼ばれ、琉球列島の南端に位置する八重山群島、(方言では「ヤイマ」、「エイマ」)さらに宮古群島と総称して先島諸島に属する。

森林原野には国の特別天然記念物のイリオモテヤマネコやカンムリワシなど、また島の動物のなかで最も大きく、本研究の対象動物であるリュウキュウイノシシが生息している。

西表島は沖縄島の南西約430km、台湾の東北約180km、北緯24° 15'～25'、東経123° 40'～55'の地点に位置している。気候は亜熱帯海洋性に属し、Table1に示すとおり、石垣島地方気象台の記録によると、年平均気温23.7度、年平均降水量2,156.0mmで7～9月にしばしば襲来する台風は降雨をもたらすが、一方風害や塩害も多い。⁵⁾ 地形は、大半が山岳の様相を呈し、標高450m前後の連山と大小無数の溪流や

Table 1 気象条件 (2004)

| | 平均気温 °C | 降水量mm | 湿度 % | 平均風速 m/s | 台風発生回数 |
|-----------|---------|---------|------|----------|--------|
| January | 18.0 | 73.0 | 72 | 4.0 | — |
| February | 18.8 | 176.5 | 73 | 4.1 | — |
| March | 20.3 | 62.0 | 76 | 3.8 | — |
| April | 22.3 | 128.0 | 78 | 3.2 | — |
| May | 26.3 | 65.0 | 81 | 3.3 | — |
| June | 27.1 | 295.0 | 78 | 3.4 | 1 |
| July | 28.4 | 34.0 | 78 | 3.7 | 1 |
| August | 28.3 | 621.0 | 81 | 4.4 | 2 |
| September | 26.8 | 302.5 | 82 | 3.7 | 2 |
| October | 24.5 | 145.5 | 68 | 5.2 | 1 |
| November | 23.1 | 10.5 | 72 | 4.4 | — |
| December | 20.7 | 243.0 | 73 | 5.1 | 1 |
| Average | 23.7 | 2,156.0 | 76 | 4.0 | 8 |

資料：石垣島地方気象台

河川が発達し、河川下流部には日本最大のマングローブが広がっている。地質は、⁶¹ほとんどが第三紀系砂岩、礫岩、シルト岩のいわゆる八重山夾炭層からなり、県内唯一の石炭層の賦存地で、島の東部に古成層の安山岩、変成岩の分布がみられ、琉球石灰岩は、大原地区、上原地区、祖納地区の一部にみられる。

植物相の種数は沖縄本島について多く、約1,150種が分布している。⁷¹ そのうち、山地性植物ではイタジイ(*Castanopsis sieboldii*)を優占種とし、オキナワウラジロガシ(*Quercus miyagii*)、タブノキ(*Persea thunbergii*)等が多く、ついでシャリンバイ(*Rhaphiolepis indica*)、イスノキ(*Distylium racemosum*)、ハゼノキ(*Rhus succedanea*)、モチノキ(*Ilex integra*)、モクダチバナ(*Ardisia sieboldii*)、アデク(*Syzygium buxifolium*)等が多くみられる。海岸性植物では、ハスノハギリ(*Hernandia nymphaeae-folia*)、ミフクラギ(*Cerbera manghas*)、モモタマナ(*Terminalis catappa*)、ハマビワ(*Litsea japonica*)、クロヨナ(*Pongamia pinnata*)、コミノクロツグ(*Arenga tremulai*)等の熱帯性の植物を多くみることができる。

西表島は、周囲約130km、面積約289.27km²で、人口はTable2に示すように最近5カ月の動態は、徐々に増加し平成18年3月末現在では2,328人となり、人口密度7.3/km²、未踏の原生林の多い沖縄第二の島である。⁸¹

Table 2 西表島の人口動態 (March, 2006)

| | 人 口 | | 合 計 | 世 帯 数 |
|-------------|-------|-------|-------|-------|
| | 男 | 女 | | |
| March, 2002 | 1,052 | 985 | 2,037 | 990 |
| March, 2003 | 1,090 | 992 | 2,082 | 1,027 |
| March, 2004 | 1,108 | 1,021 | 2,129 | 1,072 |
| March, 2005 | 1,166 | 1,081 | 2,247 | 1,172 |
| March, 2006 | 1,204 | 1,124 | 2,328 | 1,207 |

資料：竹富町

2. 調査方法

イノシシによる農作物への被害、猪垣の構造は現地調査、イノシシ猟の変遷と罠、罠に用いる樹種は聞き取り調査を行った。

研究メンバーのうち石垣は、40年間西表島で古くから伝わる仕掛けを用いてイノシシ猟をしている。最近では狩猟免許を取得してイノシシ猟をする人が増える傾向にあるが、西表島の古来の狩猟罠は島独特の方法であり全国でもあまり例がないようである。ここでは、これまで行ってきた狩猟方法、罠の仕掛け、罠に用いられる樹種等を聞き取り調査し、罠をしてきた経験も交えて西表島で古来より使用してきたイノシシ罠等を含め調査することにした。

調査結果

1. 農作物への被害

近年、本土においてニホンイノシシの被害は増加傾向にあり、農林業の被害、住宅地付近に出没し庭を掘り起こしたりゴミを荒らしたり、人間へ噛みついたりして被害を加える被

害も頻出している。被害対策として、爆竹音、石油臭、網、トタン、有刺鉄線などの対策がとられているが、⁹¹イノシシは高度な学習能力があるため持続的な効果は少ないといわれている。その他に電気柵や強固な鉄柵などがあるが、管理に手間がかかり、経費等の問題もある。また、島根県農林水産部森林整備課鳥獣対策室によるとトタン、電気柵を組み合わせると、なお効果があがるとしている。

西表島でも最近、民家の庭先で、リュウキュウイノシシを捕獲した物を実見している。リュウキュウイノシシ(*Suidae scrofa riukiuanus*)は奄美大島、徳之島、沖縄島、石垣島、西表島に分布する南方種で、生態的な特徴はニホンイノシシと同様、繁殖期は通常年1回で年によっては2回出産することがある。平均4~5頭ほどの子を産むといわれている。各島においての体長、体重には差異があるが、ニホンイノシシと比較するとかなり小さく、体長90~110cm、体重4~70kg程度とされている。リュウキュウイノシシはニホンイノシシが島嶼化現象で小型化したものと考えられるが、頭蓋骨の形状の違いなどから別種の原始的なイノシシとする見解もある。¹⁰ 沖縄では「ヤマシシ」、石垣では「ウムザ」、西表では「カマイ」と方言で呼ばれている。西表島には他島に比べ、比較的多くの個体が生息するが森林開発、狩猟者の増加にともない、全体的な個体数が減少傾向にあるのではないかと危惧されている。

人間への害についてはニホンイノシシのようにリュウキュウイノシシが被害を与えた報告例はない。Fig.1は、西表島西部地区の皆干地区(浦内橋~干立寄り)にある水田で、イノシシによる水稲の被害状況である。収穫前の水田の中に侵入し稲を食べるために踏んづけられた痕で、水田内の水のある場所から食べ始める。Fig.2は、西表島西部地区の高菱地区でパイナップルの被害状況である。

被害状況を見ると、芯の部分が抜き取られていることがわかる。芯を抜き取られることによりパイナップルの生育が遅れる。

2. 猪垣の構造と保存状況

西表島は山岳地帯のため耕作地が少なく、そのため河川周



Fig. 1 水稲の被害状況 (2006. 5).

罾を、方言で「バナ」と呼ぶ)を用いたハネ罾式の方法がある。猟銃を用いた猟は他の地域では主流であるが、西表島では数人がいるだけで多くはハネ罾を用いた猟が行われている。それは、狩猟期間中多くの人が山中に入るため猟銃を発砲すれば危険が伴うためではないかと思われる。現在主流となっている「バナ」が出てくるまでは、押し罾とイヌを使った猟をしていた。

1) 押し罾

干立在住の長老新城寛好氏(84才)によると、西表で最も古い罾でこの罾のことを「オシワナ」、方言で「ウシヤマ」(普通はヤマ)と呼んでいる。いつ頃に始まったかは不明で昭和初期頃まで利用していたという。ヤマには、ンムヌカーヤマ、チチヤマ、2つのタイプがある。仕掛けてあるヤマ本体は同じであるが本体までイノシシを誘い込む方法に違いがある。

*ンムヌカーヤマ：芋の皮を方言でンムヌカーと呼ぶ。主に畑の周辺に仕掛ける罾で、芋の皮を利用してヤマまで誘導する方法である。

*チチヤマ：獣道にヤマを仕掛け、ヤマまで枝、シダなどを使い十数メートルの柵を造り誘導する方法である。柵は時間がたつと壊れるため随時補修が必要であった。場所は主に川や沢の流域に仕掛け、一日に二ヤマから四ヤマしか仕掛けることが出来なかったとしている。ヤマを仕掛ける期間は稲作の栽培期間の4～5ヶ月間に仕掛けたとしている。方言で柵のことをチチと呼ぶ。



Fig. 7 山中に残る押し罾の跡(2006. 5).

ヤマを仕掛ける場所は、普通の罾のように山奥などには仕掛けず、ほとんど里山に仕掛けている。これはイノシシがヤマに落ちると潰され、死んでしまい、肉の腐敗が早まり、品質が落ちてしまう。そのため、短期間または短時間で見廻れる所がいいとされている。Fig. 7のような跡などは山奥で見かけることはない。そのためか、石垣島では罾と知らない人が雨降り時に、雨宿りのため中に入り押しつぶされて死亡した例があったようである。Fig. 7は高菱地区の山中に残る押し罾跡で、Fig. 8は2006年3月に干立で再現した押し罾を示したものである。

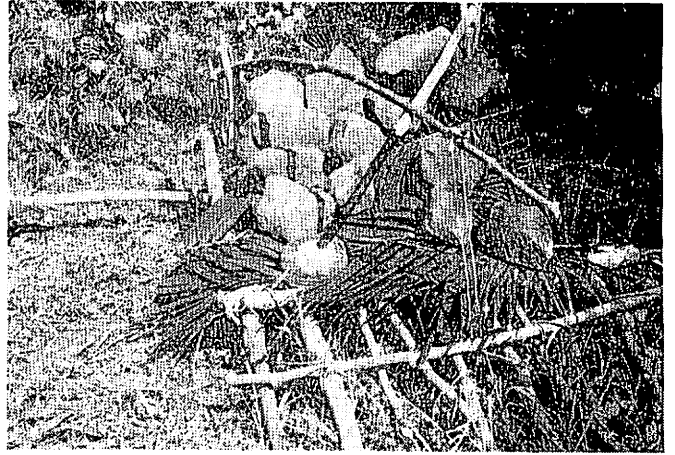


Fig. 8 再現した押し罾(2006. 3).

2) イヌを使った猟

ヤマによる狩猟の終わり頃から、ハネ罾による狩猟の始まり頃まで、1頭もしくは数頭のイヌでイノシシを追い込み人間が「フク」(ヤリに似ている)と呼ばれる道具でイノシシを突き刺すか、後ろ足を捕まえて撲殺する猟である。この猟は危険であり、イヌがイノシシの牙に当たりケガをするか、または死んでしまうこともあり人間もケガをすることがある。

ハネ罾が普及すると罾にイヌが掛かり死亡するか足が切断され猟ができなくなる。そのためかイヌ猟はハネ罾が普及するにつれ衰退しなくなってしまった。Fig. 9にフクを示す。

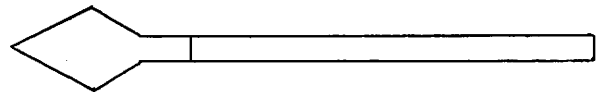


Fig. 9 フク(イノシシを刺す道具).

3) ハネ罾

ハネ罾のことを方言で「バナ」と呼ぶ。現在西表で利用されている罾は、1935～1940年頃に台湾人により導入され船浮集落より始まり、祖納、干立と普及されたのが始まりで八重山全域に広がっている。この罾は、ワイヤーを使い木の跳ね上がる力を利用してイノシシを捕獲する方法である。

「バナ」を仕掛けるにはFig. 10に示すようにチボ①、竹②、ニンギョウ③、ツメ④、さし木⑤、ワイヤー⑥の6個の部品を使う。

仕掛けの方法は、獣道に直径約15cm、深さ約20cmの穴を掘り、穴の端に竹を打ち込み、次に、チボを地面に垂直に差し、チボにワイヤー(長さ約1m、両端に輪を作る)をくくり付け、チボの先端部をツメの針金で縛り、打ち込まれた竹にニンギョウを差し込み、ツメで竹とニンギョウを固定し、約2cmの間隔でさし木を穴の中に差し込み、木の葉を置きその上から土を薄く覆い被せる。イノシシが穴に踏み込むと、ハネ木がはじけ、ワイヤーがイノシシの足にからみ捕獲され

る。Fig. 11にワナの仕掛け方を示す。

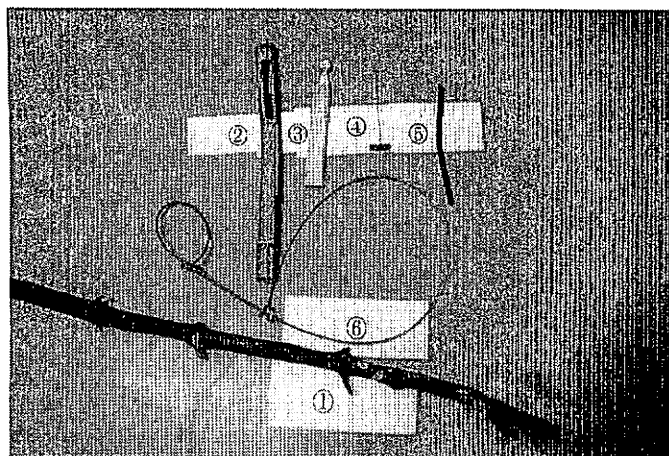


Fig. 10 ハネ罠に使用する部品。

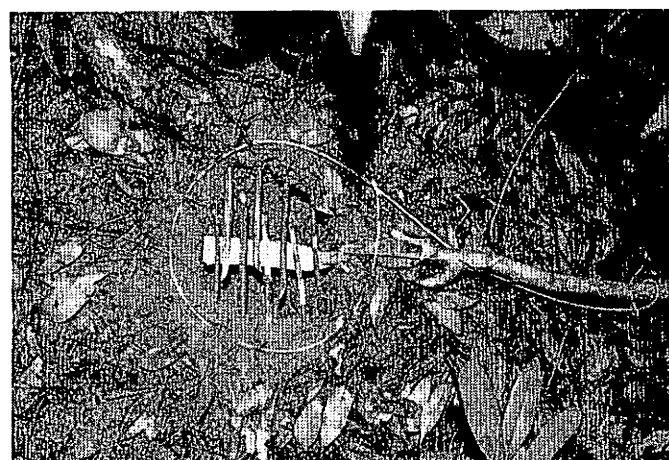


Fig. 11 仕掛けたハネ罠 (上に木の葉, 土を被せる)。

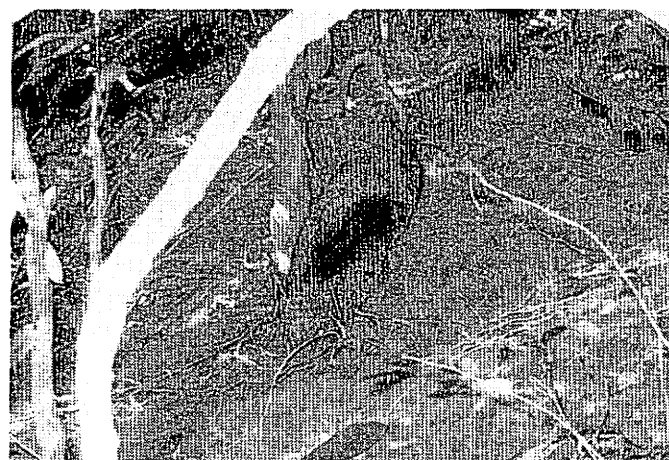


Fig. 12 ハネ罠に掛かったイノシシ。

1mmの切れ込みを作り, さらに約1.5cmの所を切り, 長さ約8cm, 幅約1cmで切り取り, 穴を開ける。

ニンギョウ: 長さ約18cm, 幅約2~3cm, 暑さ約1cmに削り, 一方の先端を直径約1.5cmの円形に削り, さらに約2cmの場所に深さ2mmの凹みに削り取る。

ツメ: 長さ3~4cmに切り, 両端を斜めに削り, 中央部を針金でくくり付け, チボにワイヤーと一緒にくくり, 竹とニンギョウを止める役目をする。

さし木: 径1cm, 長さ15cmの木, または竹を使い, 約2cmの間隔で穴の中に差し込む。

ワイヤー: 長さ約1mに切り, 両端に輪を作る。Fig. 12にワナに捕らえられたイノシシを示す。

4. 罠に用いられる樹種

1) ハネ木 (方言名, チボ) に使用する樹種

ハネ木に利用する樹種は跳ね上げる力 (腰が強い) 樹種ほど良く, また曲げたまま3ヵ月間使用するため, 長期間耐久力のある物でなければならない。それにイノシシが掛かると折れにくく, 曲げに強い樹種ほど良い。直径は2~3.5cmで, 長さ2~3mの物を利用する。良い順に示したのがTable 3である。

Table 3 チボに用いる樹種

| | Japanese name | Scientific name | Local name |
|---|---------------|---------------------------------|------------|
| 最 | シマミサオノキ | <i>Randia canthioides</i> | ダンカ |
| も | イスノキ | <i>Distylium racemosum</i> | ユシキ |
| 良 | モクタチバナ | <i>Ardisia sieboldii</i> | アブチャン |
| い | アカテツ | <i>Planchonella obovata</i> | トゥモキ |
| 樹 | シシアクチ | <i>Ardisia quinquegona</i> | ヤーモーキ |
| 種 | アデク | <i>Syzygium buxifolium</i> | アディク |
| | ヤブツバキ | <i>Camellia japonica</i> | ツバキ |
| 次 | ヒサカキサザンカ | <i>Tutcheria virgata</i> | フサライゾ |
| に | ヒメサザンカ | <i>Camellia lutchensis</i> | ミーアジュキ |
| 良 | | | ミキノ |
| い | サザンカ | <i>Camellia sasanqua</i> | ヤマツバキ |
| 樹 | ツゲモドキ | <i>Drypetes karapinensis</i> | アモーキ |
| 種 | マルヤマカンコノキ | <i>Bridelia balansae</i> | イギキ |
| | アオバノキ | <i>Symplocos cochinchensis</i> | ナタールキ |
| 三 | オオバルリミノキ | <i>Lasianthus obliquinervis</i> | カンダシカ |
| 番 | フクギ | <i>Garcinia subelliptica</i> | フカイキ |
| 目 | リュウキュウコクタン | <i>Diospyros terrea</i> | クロキ |
| の | リュウキュウガキ | <i>Diospyros maritima</i> | ガーキ |
| 樹 | ヒラミレモン | <i>Citrus depressa</i> | クンガニヤー |
| 種 | シロミミズ | <i>Trichostema cubia</i> | シスミンチキ |
| | タイミンダチバナ | <i>Myrsine sequinii</i> | ビツツキ |

これから解るように, 最も良い樹種にシマミサオノキ (*Randia canthioides*), イスノキ (*Distylium racemosum*), モクタチバナ (*Ardisia sieboldii*), アカテツ (*Planchonella obovata*), シシアクチ (*Ardisia quinquegona*), アデク (*Syzygium buxifolium*) の6種があり, 次に良い樹種にヤブツバキ (*Camellia japonica*), ヒサカキサザンカ (*Tutcheria virgata*), ヒメサザンカ (*Camellia lutchensis*), サザンカ (*Camellia sasanqua*), ツゲモドキ

4) 部品の役割

はね木 (チボ): はね木のことを方言で「チボ」と呼ぶ。最も重要な役割を果たすため, 樹種の選定が必要である。

竹: 初期の頃には, 又のついた径0.5~1cmほどの木を使用していたが, 作業に手間がかかるために現在の竹へと替わっていった。長さ30~40cmに切り, 節の下約5mmの所に

(*Drypetes karapinensis*), マルヤマカンコノキ(*Bridelia balansae*), アオバノキ(*Symplocos cochinchinensis*)の7種があり、三番目の樹種にはオオバルリミノキ(*Lasianthus obliquinervis*), フクギ(*Garcinia subelliptica*), リュウキュウコクタン(*Diospyros terrea*), リュウキュウガキ(*Diospyros maritime*), ヒラミレモン(*Citrus depressa*), シロミミズ(*Tricalysia dubia*), タイミンタチバナ(*Myrsine sequinii*)などの20種の樹種が利用されている。

2) ニンギョウに使用する樹種

ニンギョウに使用する樹種には、シャリンバイ(*Rhaphiolepis indica*), イヌマキ(*Podocarpus macrophyllus*), シマミサオノキ(*Randia canthioides*), エゴノキ(*Styrax japonicus*), モクタチバナ(*Ardisia sieboldii*)の5種が多く使われ直径も3~5cmほどの物が利用され、加工し易い生木の時に作る。また、湿った場所に長期間置くため、腐れ難い、シロアリが付き難い樹種程良く、それからするとエゴノキはあまり良くない。

3) 竹

竹にはカンザンチク (*Pleiblastos hindsii*)が一般的に使われている。その他にホウライチク(*Bambusa glaucescens*)がある。カンザンチクについては狩猟の時期に切り取られ、タケノコの時期にも取られるため再生が進まず、竹林が消滅しつつある。

考 察

イノシシは古来よりシカや他の動物と共に狩りの対象として、人間にとって重要な存在であった。しかし、人口の増加、食料の安定供給の確保などがありイノシシの家畜化が進み豚へと変わっていったと考える。また、農耕文化が発達することにより野生のイノシシなどの農作物への被害が進み、その被害対策として猪垣や、これまで行っていたヤリや弓の猟から罠を仕掛けて捕獲する技術が起こっていったのではないかと考えられる。

これまで西表島や石垣島で行われてきた押し罠猟は罠を仕掛けるための材料の調達などに手間がかかり、その後の管理作業にも労力を要するが捕獲量が少ない、そのため簡単にできるイヌ猟やハネ罠猟へと変遷していったのではないかとと思われる。押し罠同様に猪垣も労力を要している。砂岩、サンゴ石などによる築造は全島民の作業を要し、それを継続することにより維持、管理されたが、水田のサガリバナの木柵は容易で材料も調達しやすかった。現在の水田周辺の水田サガリバナ群落などはその形跡の可能性はある。

イヌ猟は限られた期間だけ猟をするのではなく、周年を通して行っていた。しかし、ハネ罠の普及によりイヌが罠に掛かり死亡あるいは足の切断などの事故が多いため衰退していったものと思われる。本格的なイノシシ猟となったのはハネ罠猟になってからだろう。これは、イノシシの肉が島外へ移出されるようになり、短期間で臨時的に高収入が得られるためである。また、狩猟資格が簡単に取得することができるのもひとつの要因であると考えられる。ハネ罠は1935年~

1940年頃に台湾から炭坑あるいは船員により導入され船浮より始まったとしているが、これまでに互いの往来により多くの技術が伝播された一つだろう。ハネ罠は島民に容易に受け入れられ西表島から八重山全域へと広がっていった。ハネ罠猟はこれまでの猟に比べ捕獲量が極端に多い。さらに、罠の仕掛けが単純であり、仕掛けの材料の調達が容易で道具も軽量で、森林の奥まで入ることができ、個人で一日に大量に仕掛けることが可能である。それらの要因によってハネ罠猟が広く普及していったものと考えられる。

ハネ罠猟でチボに用いるシマミサオノキ、イスノキ、シシアクチ、アデクなど材の弾力性の強い樹種は西表島の亜熱帯照葉樹林の低木層で出現度が高く、またニンギョウに用いるシャリンバイ、モクタチバナ、エゴノキなども構成樹種として多く生育する。したがってハネ罠猟は島の森林に広範囲に仕掛けることができ、押し罠猟や猪垣のように労力を要するものから、手軽に作業ができる技術、道具、材料、そして罠の数量、捕獲量の多さが島民に受け入れられ、西表島の伝統的なイノシシ猟に発展してきたものと思慮される。

イノシシ猟は年々狩猟資格者が増え、狩猟期間になると島の森林のいたるところに罠が仕掛けられている。最近では観光入城者の増加、自然観察やトレッキングなど入林者が増加する傾向にあるが罠に掛かっているイノシシは、人間に対して攻撃性があり危険なため注意を促す必要がある。イノシシによる農作物への被害は現在も頻発しており、とくに水稲、パインアップルの食害が大きく、イノシシ猟は被害軽減のためにも将来にわたり必要と考える。

罠が盛んになることは、農作物被害の減少に効果があると思われるが、森林生態系ではイノシシの生息数の減退とチボやニンギョウの利用による有用樹の減少、森林荒廃に及ぼす影響も大きい。竹に多く用いられているカンザンチクはタケノコにも採取され、再生量がきわめて低下している現状にある。島独特の伝統的な狩猟形態に変遷してきたハネ罠猟を、断絶することなく島の自然と調和する持続的なイノシシ猟とする必要がある。持続的なイノシシ猟のためには、亜種として進化を遂げてきたリュウキュウイノシシ、亜熱帯照葉樹林を構成するチボやニンギョウの材料樹種の保全と利用のバランスを維持し、イノシシ猟を島の生態系でとらえることが緊急で大事なことだろう。

要 約

西表島に生息するイノシシは、ニホンイノシシに比較して小形のリュウキュウイノシシである。イノシシ猟は西表島の自然と人間の生活の共存の中で維持されてきた。西表島におけるイノシシ猟の伝統的な技術の変遷をたどり、現在、住民が行っているイノシシ猟の方法とそれに係る生息数などの実状を明らかにし、安定的で持続的なイノシシ猟の需要を図ることを目的とした。

調査の結果、イノシシの狩猟資格者が多くなりそれに伴ってイノシシの生息数が急速に減少している実状にある。イノシシ猟は押し罠猟、イヌ猟、ハネ罠猟、銃器と変遷しており、

現在は、銃器猟、ハネ罾猟があり、西表島では罾猟が盛んである。

ハネ罾猟は、西表島独特のワイヤーを用いて、チボ、竹、ニンギョウ、ツメ、さし木の6個の部品を使って仕掛ける。なかでもチボは最も重要で、20種の樹種が用いられ、最適な樹種にはシマミサオノキ (*Randia canthioides*) など6種がある。猪垣は、石積み、斜面の掘削、木柵などがあり、石積み材料には砂岩やサンゴ、木柵材料にはサガリバナ (*Barringtonia ramosa*) が利用されている。

健全なイノシシ猟のためには、伝統的な自然との共存のあり方を再検討する必要がある。

謝 辞

本研究をまとめるに当たり、聞き取り調査、場所の案内、写真等多には西表島在の新城寛好氏、美佐志義一氏、石垣長治氏、長澤孝道氏、石垣在の戸真伊亀吉氏、大底克氏に世話になった、また琉球大学法文学部の吉本靖助教授にはAbstractの英文の校正をしていただいた、以上の方々に厚く敬意を表す。

本研究の一部は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(2)課題番号「15380111」によって実施したものであることを付記する。

引用文献

- 1) 高良鉄夫. 1993. 沖縄の緑と自然. 沖縄県, 112pp.
- 2) 伊澤雅子ほか. 1991. イリオモテヤマネコ・ツシマヤマネコ保護対策の現状. 哺乳科学, 31(1)15-22.
- 3) 伊澤雅子ほか. 1994. 目撃記録からみたイリオモテヤマネコの生体Ⅱ. 沖縄島嶼研究, (12): 37-52
- 4) 星勲. 1945. 西表島のむかし話. ひるぎ社, 243pp.
- 5) 沖縄総合事務局石垣港湾工事事務局. 1998. みなとの風土記. 沖縄総合事務局, 69pp.
- 6) 八重山支庁. 2005. 八重山要覧. 沖縄県, 173pp.
- 7) 新本光孝, 石垣長健, 新里孝和, 安里練雄, 呉立潮. 2005. 亜熱帯沖縄の主要島嶼における植物の分布について. 九州森林研究, 59: 60-64.
- 8) 竹富町. 2006. 3. 竹富町地区別人口動態表.
- 9) 外間数男. 2004. 畑の景観—文化地理的考察, 2. 囲い込み農業. 沖縄農業, 38(1): 49-57
- 10) 池原貞夫, 与那城義春, 宮城邦治, 当山昌直. 1941. 琉球列島動物図鑑Ⅱ. 陸の脊椎動物, 新星図書, 沖縄, 351pp.
- 11) 八重山支庁農林水産振興課. 2006. 八重山の農林水産業. 沖縄県, 81pp.
- 12) 現代農業. 2003. 鳥獣害対策大特集. 農文協, 378pp.
- 13) 初島住彦, 天野鉄夫. 1995. 琉球植物目録. 沖縄生物教育研究会, 沖縄, 230pp.
- 14) 琉球新報. 2005. 12. 22. 未来への遺産.
- 15) 日本学術振興会. 2003. アジア・太平洋の環境・開発・文化. 未来開拓大塚プロジェクト事務局, 219pp.
- 16) 川平永美述, 安溪遊地, 安溪貴子編. 1990. 崎山節のふるさと. 西表島の歌と昔話, ひるぎ社, 189pp.
- 17) 山田雪子述, 安溪遊地, 安溪貴子編. 1992. 西表島に生きる. おばあちゃんの自然生活誌, ひるぎ社, 211pp.
- 18) 天野鉄夫, 沢岬安喜. 1989. 琉球列島有用樹木誌. 沖縄出版, 沖縄, 472pp.